



## カンショ(サツマイ)の食葉害虫ナカジロシタバやハスモンヨトウなどの防除対策について

カンショ畑では8月後半～9月頃から、食害痕のある葉が目立つようになります。これは、ナカジロシタバやハスモンヨトウ、エビガラスズメなどの幼虫が食害したため、これらが成熟幼虫になるとナカジロシタバは4～5cmくらいに、ハスモンヨトウは4cm前後、さらに大きなエビガラスズメは8cm以上の大型幼虫となり、カンショの葉を暴食して葉柄だけを残して食べつくすことがあります。

これからカンショの塊根が十分肥大する前に食害が多発生しますと減収を招く恐れがありますので、十分な注意が必要です。また、ナカジロシタバは餌を求めて移動する際に民家等に侵入し、不快害虫として問題になる場合があります。

病害虫発生予報8月号(県病害虫防除所)によると、7月下旬現在、ナカジロシタバの発生は、つる先の被害率、発生地点率ともに平年より高く、8月の発生量は多いと予測しています。

今後の気象1ヵ月予報(7月27日発表)では、「期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。平均気温は高い確率70%」と予想され、害虫の発生を助長する条件と考えられるため、今後とも注意が必要です。

なお、**ナカジロシタバやハスモンヨトウなどの幼虫は齢期が進んで成熟するほど、農薬に対する抵抗力が高まり、防除効果が低下するため、若～中齢の早い時期に薬剤防除することで安定した防除効果が期待できます。**

これらの害虫は、これから9月中にかけて発生して被害が最も大きくなることから、圃場の発生状況をよく観察し、発生に応じて薬剤防除に努めてください。

### ナカジロシタバの発生生態

ナカジロシタバは年3回世代を繰り返します。例年は**9月上旬頃から発生する第3世代幼虫の発生量が最も多くなります**。成虫は夜間に飛び回り、葉の裏に卵を産み付けます。ふ化した若齢幼虫は、つる先の若い葉を好んで食害します。中～老齢幼虫になると、昼間は茎葉の陰などにひそみ、夜間に活動して、葉脈だけを残して暴食するようになります。成熟した幼虫は土中にもぐってマユをつくり、その中で蛹になります。



ナカジロシタバ初期被害



ナカジロシタバ中齢幼虫

写真：病害虫防除所

### 防除対策のポイント

- ナカジロシタバの防除時期は、葉に丸い穴が散見される頃から葉の四分の一くらいが食害されて食害が目立つ時期(幼虫の若～中齢期)に行います。また、ハスモンヨトウでは、かすり状に食害された葉が散見される頃から幼虫が分散する前(若～中齢期)に薬剤散布を行います。
- 薬剤防除の際は、幼虫が潜んでいることが多い葉裏や株の中にまで、薬液が十分かかるよう丁寧に散布します。

表1 カンショ食葉害虫 ナカジロシタバ、ハスモンヨトウの主な防除薬剤 (令和5年8月1日現在)

薬剤名	ナカジロシタバ	ハスモンヨトウ	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
アニキ乳剤	○	○	2,000～3,000倍	収穫前日まで / 3回以内	6
アクセルフロアブル	○	○	1,000～2,000倍	収穫前日まで / 3回以内	22B
ディアナSC	○	○	2,500～5,000倍	収穫前日まで / 2回以内	5
フェニックス顆粒水和剤	○	○	2,000～6,000倍	収穫前日まで / 2回以内	28
アグロスリン水和剤	○	○	1,000～2,000倍	収穫7日前まで / 5回以内	3A
トレボン乳剤	○	○	1,000倍	収穫7日前まで / 3回以内	3A
トルネードエースDF	○	○	2,000倍	収穫7日前まで / 2回以内	22A
ノーモルト乳剤	○		1,000倍	収穫7日前まで / 2回以内	15
		○	1,000～2,000倍		

注1) 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

注2) 分類15(ベンゾイル尿素系)の剤は、殺虫効果の発現に比較的時間がかかるため、散布時期を早めにしてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農NEWSはJA全農いばらきホームページでもご覧になれます。